夢詩壷

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢詩壷

【Ｎコード】
Ｎ７５３４Ｚ

【作者名】
磯崎愛

【あらすじ】
自サイトからの転載です

【全年齢・現代恋愛小説・完結済】

３０代独身ＯＬ深町姫香は古道具屋「時任洞」の常連だ。
店には読書好きの獏がいて、どんな夢でも見ることができるという「壷」を売っていた。
その壷をあずかってから姫香は奇妙な夢を見るようになり……！？

本と夢を巡る恋愛ファンタジー。

睦月――時任洞の物語　うつし世は夢　夜の夢こそまこと　<1>

失敗した。

こんな日にかぎってピンヒールのブーツ履いてきちゃったよ。

二十二半の靴の踵が落ちるほど狭い、手すりのついた急な階段を見あげていったん立ちどまり、カラオケボックスの派手な蛍光看板をちらりと横目にし、気合を入れてカバンを肩にかけなおす。

左手には本の入った紙袋の持ち手が食いこんでいる。

目指すは「時任洞」。古美術・古道具屋だ。

一階に大衆居酒屋、二階にカラオケ、三階には現代アート画廊というエレベーターもない雑居ビル最上階の四階にそれはある。

「こんばんは」

入り口にかかる藍染の暖簾をおしあげて見えるのは、正面に陣取る階段箪笥だ。

その上にそれぞれ、紫座布団に座った金色の招き猫、マサカリ担いだ金太郎さん、ガラスケースに入った博多人形が置かれている。

これだけ頭身の違うものを同じ高さだというだけで並べられる店主のセンスがすごい。

長方形の室内はせりあがった左奥半分に畳がしいてあり、和箪笥や鏡台やその他さまざまな家具や雑貨がひろがっている。床には露店のごときまとまりのなさで、ひびの入った七輪やごろんとした臼が転がっていた。

右奥正面にはカウンター代わりのテーブルがあり、手前だけヴェトナム風の染付け皿や手提げ籠、箸置きやキャンドルやこまごまと雑貨がのっている。

その後ろ、仕切りの向こうが事務所だ。

まったくもう、お客がきたのに出てきやしない。

古美術の部分はどうも、うそくさい。作り付けの棚には箱書きのついた萩茶碗もあるけれど、さっぱりよいものに思えない。その隣

に安手のお題茶碗がばらばらと並べてあるのが艶消しなのだ。じゃあ何が目当てかというと焼き桐の箪笥におさまった古裂とアンティーク着物だ。

なにを隠そうこれにはまって二年ばかり、月一ペースで通っている。

初釜におよばれしたあと、「茶道具セール」の看板につられたのがはじまりだ。

これで店主が眼鏡の似あう美青年だったなら、私だってもっと頻繁に来ることだろう。ところが、鳩時計のかけられた仕切りの奥にいるのは、美青年どころか人間でもない。

まあ、ありていにいって、いやもうこのさいはっきりいうけれど、そこにいるのは正真正銘の獏なのだ。

夢枕獏じゃないよ。彼なら、即刻『キマイラ』の続きを懇願する。

「あら、いらっしゃい」

ようやく目の前にあらわれたのはおよそ体長二メートル、熱帯地方にいて夢を食べるという奇蹄目バク科の獏。

ただし、動物園にいる獏ほど泥っぽくない。

いま特別な洗剤で洗ったばかりというくらいつるピカの、白黒の巨大なマレー獏がのっそりと長い顔をあげていた。

「さっきからずっと、誰に話しかけてるの？」

生意気に、こんなデカブツなのにめちゃくちゃ可愛い声で話すのだ。

「読者だよ」

「それ、いないと思うよ？」

チチチ、私は舌をならして人差し指をふる。

睦月――時任洞の物語　うつし世は夢　夜の夢こそまこと　＜2＞

「いないかどうか確かめる手段は私達にはないの。シュレディンガーの猫といっしょでね」
「なにそれ、トリビア？」
「ちがうよ。読者が本を開いて読み始めるまでその中身がどんなものなのか、ほんとうのところは誰にも確かめようのないものなの。書評とか帯の文句に騙されちゃだめよ。本の中身はそのひと自身の一回ごとの体験で、けっして同じように繰り返されることのない、再現不可能な貴重な体験をいうの。
　本というのは本来、そういうもの」
「そうかなあ」
　獏が長い口吻を左右にふる。ちょっと、象に似てる。そのまま、よっこいしょ、と近くの丸椅子に腰掛けた。
　いつも不思議なんだけど、座れるんだよね。
「読書がいったい何に似ているか、考えたことがある？」
「なにって」
「人生」
「はあ～？」
　今、半目になったよ。獏のくせに！
「信じてないな」
「だ～って～」
　獏は身をよじって上目遣いで私を見た。
「アタマ悪いひとに見えるから語尾をのばすなって言ってるでしょ」
「でもぉ、じっさいあたし、バクだしぃ」
「そこは馬鹿だよ、バ、カ」
「やだ～、あたしバクだからぁ、ウマシカだけは言われたくないのに、ひっどお～い」
　獏は二足立ちになって長い頤したに両前脚をもってきて、頭を左

右にゆるゆるとふってみせる。
これはもう、わざとやっているのだ。
ひねこびた三十代独身ＯＬ（昨今では負け犬というらしい）には何があっても真似できない荒業だ。
もっとも大昔の美少女アイドルと違って、ふんわりカールした髪が揺れたりしないからただただ不気味なだけなんだけどね。
「それで、今日の呼び出しはなに？」
さっさとビジネスモードに切り替えた。
月末の呼び出しは珍しい。出物でもあったのかしら。
友達が吉祥寺でやっている古着屋さんにここの布地や小物を卸している。
月に儲けは映画一本分もないアルバイトだ。去年一年の収支でいうと有田の鶴首（代金二万円）さえ回収できていない。
でもまあ、自分の選んだ布地がお洋服や可愛い小物になって買われていくのはうれしいものだ。
獏もすぐ了解して、黒檀のテーブルにのった小さな壷を口吻でさししめした。人間でいえば、あごでしゃくったというところだろうか。
「これが？」
いつものアルバイトじゃないと気づいて眉をひそめた。
これは商売のほうだ。
つまり獏の本業、夢売りの仕事。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7534z/

夢詩壷

2011年12月25日21時55分発行